

2. 高知平野における古墳時代後期の竪穴住居について

—カマドより見た予察—

(1) はじめに

今次調査で確認した古墳時代後期の竪穴住居造り付けカマドはいずれも、これまで散発的に検出されている高知平野の古墳時代カマドと比較して良好な遺存状態であった。従って以下ではまず、今次調査の古墳時代竪穴住居についてカマドを中心にその特徴を明らかにした後、高知平野の同件についてまとめを行う。続いて他地域との若干の比較を行うことにより、高知平野の古墳時代後期の様相について造り付けカマドから見た一側面を把握したい。なお、本県では当該期の移動式カマドの出土例は認められず、以下で言う「カマド」は造り付けカマドを指す。また、カマド各部の呼称・計測方法についてはIV章19ページに準ずる。

(2) 下ノ坪遺跡の竪穴住居及びカマド

今次調査で4棟の古墳時代竪穴住居が確認された。時期差については表Cに示したように1期-ST 1、2期-ST 2・ST 3、3期-ST 4の3時期が想定でき、1期は6世紀後半、2期は6世紀末～7世紀初頭、3期は7世紀代とそれぞれみることができる。規模はST 1が18.4㎡、ST 3が19.5㎡で、ST 4も少なくとも1辺の長さはこれら2棟と近似するのに対して、ST 2は32.2㎡と明らかに大きい。カマドについては次のような特徴をあげることができる。まず位置についてはST 1・2・3が全て住居北壁、ST 4は東壁に設置されている。住居の全容が明らかなST 1・ST 3ではいずれも北壁の中央に設置されていることが確認できるが、各々支脚は住居の主軸上に正確に設置され、カマドの位置を極めて正確に定めていると言える。なお、後述するように今次調査のカマドは全て支脚をその中心と見てよい。またカマドと住居壁との関係については、カマド本体である燃烧室が外側へ突出するものや、長い煙道が検出されるものは存在しなかった。次にカマド自体の構造については、袖や焚口天井及び支脚に石材を使用することが共通の特徴である。支脚が燃烧室のほぼ中央に位置し、支脚部以外に別の掛け口を想定することが難しいので、甕1つ掛けであることも4件全てに共通する。またST 1を除く3件では張り床を確認したが、これは防湿に資したものと思われる。さらに各カマドについてまとめたのが表Cで、平面形の比較をしたFig. 77は支脚を中心として奥壁が平行になるように重ねたものである。これらを一見して各石材間及び奥壁との距離、延いては燃烧室の規模・焚口幅において一定の符合が看取される。勿論遺存状態に違いがあるため完全に同一条件の下での計測・比較とはいえないが、何らかの規格性をみることもできるのではないだろうか。先述のようにカマドの設置位置に相当の注意を払っていることや、ST 2に見られるように住居の規模が大きく異なってもカマド規模に変化のないことも、間接的ではあるがこの仮定を補強する要素と捉えておく。そう仮定した場合、そのような規格を実現するために当然ながら各石材も選択され(表C)、必要に応じ第IV章で報告したように若干の調整を行ったのである。なお、ST 1とST 4では時期的な隔たりがあるが、現状ではそれについて検討できる資料が揃っていない。

次に第IV章で個々に述べた住居址での遺物出土状況についてまとめると、概ね土器はカマド及びその付近に集中する傾向を示している。中でもST 1は特徴的な出土状況で、住居廃絶行為の現れ

	時期	カマド位置	カマド計測値（数値は全てcm。〔 〕は復元推定値。）							石材長（数値は全てcm。）			廃棄行為
			支脚から焚口	支脚から奥壁	焚口から奥壁	焚口幅	奥袖幅	前袖石高	支脚高	袖石	天井石（各1個分）	支脚	
ST 1	6C.後半	北壁中央	36	36	72	56	〔128〕	24	不明	右前42	29(打割)	不明	左前袖石及び支脚 抜去。焚口天井破壊。 煮炊具散布。
ST 2	6C.末～ 7C.初	北壁	47	28	75	52	〔102〕	28	16	右前39	42, 40	26	焚口天井破壊。
ST 3	6C.末～ 7C.初	北壁中央	38	31	69	50	93	不明	12	39	不明	20	石材4個抜去。高 杯供献。
ST 4	7C.代	東壁	40	35	75	47	90	〔25〕	14	右前38, 左前36, 右奥 20(打割), 左奥32	不明	25	

表C 下ノ坪遺跡のカマド

と見なければならない。ST 2・3でも土器はカマドに集中しているがST 1で見たような特徴はみられない。しかし、ST 2ではカマド検出時にほぼ完形の杯蓋が出土し、ST 3では2個の高杯が炎焼部より出土している。これらの遺物は出土状態やカマドの構造から見て、支脚やその補助といった用途では説明できず、カマド祭祀の可能性を含めて今後の検討が必要である。さらにST 1・2・3では全てカマド廃絶時に破却行為が行われていることも留意しておかねばならない。残るST 4は上記と大きく異なった様相で、住居址出土の遺物が極端に少ない。カマドからの遺物も皆無であり、僅かにカマドの左方で須恵器壺が1個出土したのみであるが、これが何に起因するかは後述するように現在判断できる段階にない。

(3) 高知平野におけるカマドを持つ竪穴住居より見た古墳時代後期の様相

① はじめに

本県では古墳時代後期の集落が大規模に調査された例はない。当該期住居址の検出例が近年比較的蓄積されてきた本県中央部の高知平野における検出例を列举し、特徴的な事項を抜粋したのが表Dである。以下では表Cと表Dに沿ってカマドより見た竪穴住居の特徴を掴んだ後、当地域の古墳時代後期の様相についても考えてみたい。なお、対象は原則的にカマドの有無が判別可能な住居址としたが、甑や長胴化した大型甕が出土した住居址も挙げた。

② 高知平野における古墳時代後期竪穴住居址の検出例とカマドの特徴

当地域における5世紀代の住居址の検出例は極僅かで、5世紀中葉～6世紀前半に属することが確実な例はない。表Dのごとく6世紀中葉～後半から高知平野東部において一定の検出例が見られるようになる。従って当地域におけるカマドの初現もこれ以前に遡る事はできず、以後竪穴住居が確認できる7世紀代まで、カマドの有無の判別が可能な住居の殆どにカマドが造り付けられている。

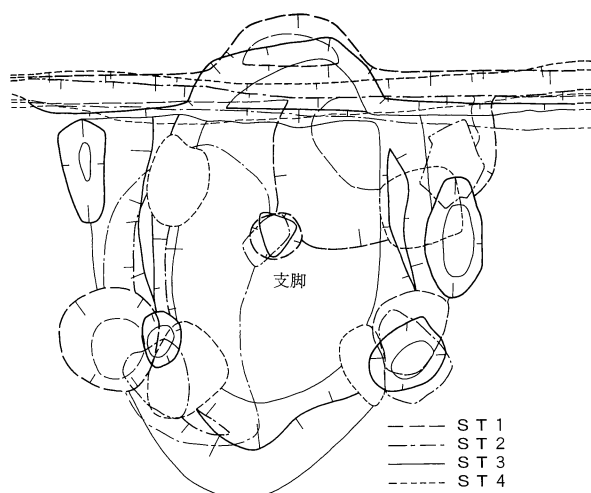
まず対象住居址のカマドを比較する。比較に適するものは土佐国衙跡ST 04・10・11、深淵遺跡ST 2・4、拝原遺跡ST 7、小籠遺跡ST 10、ひびのきサウジ遺跡ST 10、及び今次調査の下ノ坪遺跡（以下下ノ坪遺跡）の4棟である。まず、土佐国衙跡ST 11では北壁際に焼土が方形に広がり、その中央に石の支脚が立つ。焼土域の南東隅にも石が位置し右前袖石と見られる。奥壁と石材間の距離や、焼土範囲から推定されるカマドの規模は、下ノ坪遺跡例と近似する。土佐国衙跡ST 10で

	時 期	規模(単位m)	カマドの有無 及びその位置	カマド及び住居の特徴(数値はcm)	カマド出土 の 遺 物	住居出土の遺物
土佐国衙跡 ⁽¹⁾						
S T 11	6C.中葉 ～後半	短軸3.3	北壁(中央の可 能性大)	左前袖石, 石製支脚。支脚から奥壁35。 焚口から奥壁約70。	伏せた長甕1。	少。埋土中に石多し(人頭大 の石含む)。
S T 08	6C.後半	約6.0×6.0 ○	北西壁中央 ○	焚口から奥壁は約70と見られる。	(記載なし)	比較的少。甕1。
S T 09	6C.後半	(6.0×6.0)	南東壁の可能性	焼土集中域。	(記載なし)	柱穴より甕1点のみ。
S T 10	6C.後半	5.1×6.0	北西壁中央 ○	右前袖石(長さ35)のみ残存。焚口から 奥壁75。住居北東隅よりカマド石材3個 (長さ42・48・48)。	(記載なし)	多。特に破片多し。甕あり。 埋土中より拳～人頭大の石多 数。
S T 04	6C.末	6.0×6.0か。	北壁(中央か。)	両前袖石, 石製支脚残存。焚口幅63。焚 口から奥壁66。煙道部と思われる窪み。	伏せた長甕1。	カマド近くに蓋杯。甕。
S T 01	後期後半	2.6×4.6 ○	北 ○	粘土と焼土。	横瓶。	少。主にカマド。
S T 02	後期後半	東辺3.2	北	粘土と焼土。	(記載なし)	南壁際より甕1。
S T 26	後期後半	4.4×4.3	確認されてい ないが、住居址自 体の削平が著し い。			長甕1を含む土師器甕3。
深淵遺跡 ⁽²⁾						
S T 4	6C.後半	5.0×5.7 ○	北壁中央 ○	石製支脚。焚口幅約50。支脚から奥壁65。 左前袖石拔痕か。	土師器甕・鉢、 蓋杯。	南部床面より杯蓋。甕把手あ り。
S T 5	6C.末～ 7C.初	約5.6×4.6	有無不明	埋土中に多数の拳～人頭大の川原石。特 に南部に多い。遺物も礫と共に浮いてい るものが多い様である。		多。最少2個の甕, 長甕, 須 恵器長脚高杯, 甕等多数。
S T 1	6C.末～ 7C.初	3.6×3.5 ○	有無不明			埋土中より土師器甕, 甕把手, 蓋杯。
S T 2	6C.末～ 7C.初	4.0～4.5 ○	北壁中央 ○	焚口幅約50。焚口から奥壁80～90。	長甕2。	杯蓋。複数の甕。南東壁際に 砥石。
拝原遺跡 ⁽³⁾						
S T 8	6C.後半	4.9×4.6 ○	無			埋土中より蓋杯, 壺。
S T 10	6C.末～ 7C.初	5.1×5.9 (6.3) ○	北壁	焼土集中域。		埋土中より土師器甕, 蓋杯。
S T 7	6C.末～ 7C.初	3.8×5.7	北壁	石製支脚。支脚から奥壁22。	手捏ね, 蓋杯, 土師器甕。	住居中央部より重なった蓋 杯。
小籠遺跡 ⁽⁴⁾						
S T 10	6C.末	4.0×3.7 ○	東壁やや南寄り ○	煙道部らしき掘込みあり。	伏せた甕, 甕, 蓋杯各1。	杯蓋, 土師器甕各1はカマド の右方と, 左方の住居隅出土 の破片が接合。両地点出土の 土師器甕は計4個。遺物は床 面と埋土中のものが接合。
ひびのきサウジ遺跡 ⁽⁵⁾						
S T 2	6C.後半 ～7C.初	5.0×4.9 ○	北壁中央 ○	カマドの残りは悪い。掘込みの南北長約 100。カマド床に石2個(長さ13, 19)。	土師器高杯2。	土師器甕, 杯蓋。
S T 7	6C.末～ 7C.初	4.5×3.3 ○	確認されてい ないが、住居址自 体の削平が著し い。			赤変した長甕, 蓋杯。
S T 10	6C.末～ 7C.初	4.5×4.3 ○	北壁中央やや西 寄り ○	左奥袖石拔痕らしきビットあり。焚口幅 55～65前後, 焚口から奥壁約75。	伏せた長甕, 杯 蓋各1。	床面より蓋杯。埋土中に散在 する杯身。
田村遺跡 ⁽⁶⁾						
S T 1	7C.初頭 頃	1辺3m	有無不明			埋土中より土師器甕1, 甕, 床面より蓋杯1。

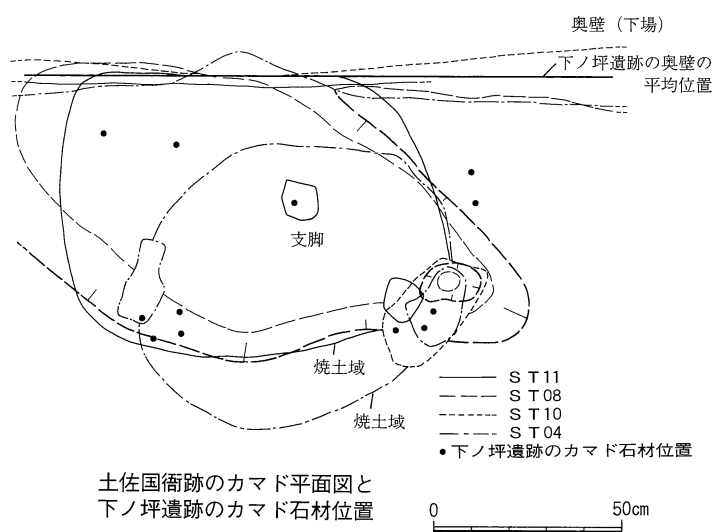
* 計測にあたっては可能な限り原図上で行うよう努めた。

* 「規模」欄の○は住居址の全容が明らかなことを, 「カマドの有無及びその位置」の○はカマド設置壁の全容が明らかなことを示す。

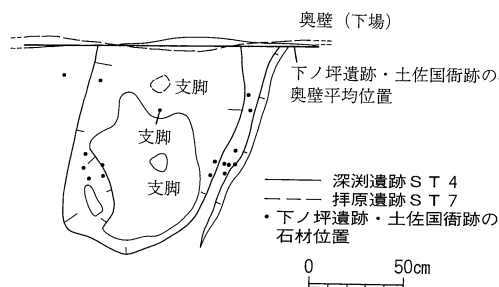
表D 高知平野のカマドを持つ竪穴住居址



下ノ坪遺跡カマド平面図



土佐国衙跡のカマド平面図と
下ノ坪遺跡のカマド石材位置



深淵遺跡 ST 4・拝原遺跡 ST 7 カマド平面図と
下ノ坪遺跡・土佐国衙跡の石材位置

※石材位置は接地面の中心

Fig. 77 下ノ坪遺跡・土佐国衙跡・深淵遺跡・拝原遺跡の
カマド平面の比較

はカマド右袖が残存しており、右前袖石とみられる石材は長さ35cmを測る。住居隅には3個のカマド石材が遺棄されている。それぞれ長さ42、48、48cmを測り、角張ったチャートである点には下ノ坪遺跡 ST 2 との近似性が看取される。土佐国衙跡 ST 04 では焼土塊の中央と両側に石材が立ち、その位置関係は下ノ坪遺跡例とほぼ一致する。計測値がやや異なるのは、石材の形状や奥壁の角度によるものと考えてよい。深淵遺跡 ST 4 は両袖の中間に長さ17.6cmの加工された石製支脚が立ち、両袖部も指摘できる。各部の位置関係は土佐国衙跡と下ノ坪遺跡の諸例と共通する要素も多いが、支脚から奥壁までの距離が大きく異なる。また支脚から住居の東西両壁までの距離は、下ノ坪遺跡例のような正確な等距離とはなっていない。深淵遺跡 ST 2 は両袖の立ち上がりが比較的明瞭に残る。カマドの規模は土佐国衙跡と下ノ坪遺跡の諸例とほぼ一致するものの、石材拔痕等は報告されていない。拝原遺跡 ST 7 は、長さ10cmの加工された河原石の支脚が直立するが、他例と比較して支脚から奥壁までの距離が短い。小籠遺跡 ST 10 では焼土と左袖石拔痕とも見られるピットが検出されているが、他例との近似性を積極的に指摘し得ない。

以上をまとめると、まずカマドの残存状態は石材の使用が認められる点以外は良好とは言えない。掛け口については、2つ以上の甕を掛けたと考えられるものは無く、支脚の検出されたものについては全て両袖の中間にある。この2点は、⁽⁷⁾⁽⁸⁾西日本の大勢に沿うものである。設置さ

れる位置は北壁と東壁の例があるが、圧倒的に北壁が多い。また設置される壁のほぼ中央部に位置し、著しく隅に寄った例は無い。次にカマドの規模と構造については、土佐国衙跡と下ノ坪遺跡の検出例の近似性が目立つ（表D、Fig. 77）。その共通点はまず、支脚や袖の構築に石材が用いられることで、石はしばしば調整加工されている。また各石材と奥壁の相互位置関係には一定の規格性が見られ、それにより焚口幅は50～56cm、焚口から奥壁は70～75cm程度の値を示す。以下では便宜上、このような特徴を持つカマドを下ノ坪・国衙型と仮称することとする。先述の下ノ坪遺跡と同様に土佐国衙跡でも、住居の規模に隔たりがあってもカマドの形態や規模に差異は無い。この事実も、両遺跡のカマドが一定の規格に則って構築されているとする推測を補強する。それ以外の遺跡に目を移すと、先述のように深淵遺跡 ST 4、拝原遺跡 ST 7 のカマドは下ノ坪・国衙型に属するものとは言えない（表D、Fig. 77）。その他の各遺跡の各住居址のカマドも、下ノ坪・国衙型との近似性を積極的に指摘し得るものは無い。ただ、ひびのきサウジ遺跡 ST 10は、カマド規模と左奥袖石拔痕らしきピットが存在する点に下ノ坪・国衙型に属する可能性を残す。なお、これらの比較資料は調査年次も区々で、必ずしも共通の基準による資料でないことに注意を要する。

次に住居址出土の遺物のうち煮炊具についてふれておきたい。対象とした住居址より出土した甑は、全て土師器で牛角状の把手を持ち、底部は筒抜けで大型のものと思われる。このような甑と組み合う主な甕は大きさと形状から、長胴化した大型の甕であろう。一般に大型甑と大型甕のセットがカマドと密接な関係を持っている事は論を待たない。⁽⁹⁾表Cと表Dで対象とした24棟の住居址のうち、甑や大型甕の出土した住居は優に半数を超える。対象の住居址には削平を受けていたり、部分的な調査であったものも多いことを考慮すると、カマドと大型甑・大型甕に小型・中型の甕を加えた煮炊の様式は十分に普及していたと言えるであろう。なかには下ノ坪遺跡 ST 1・ST 2や深淵遺跡 ST 2・ST 5のように2つ以上の甑が出土した住居址もあり、他地域と比較しても甑が出土する比率は遜色ないと言える。なお、住居址から出土する遺物の問題については他地域と比較して後述する。

③ 堅穴住居より見た高知平野の古墳時代後期の様相

上に挙げた住居址の例より、当地域における古墳時代後期の様相について若干の推察をしてみたい。まず古墳の分布をみると、本県は前期古墳が極端に少ないことで知られている。そして横穴式石室が最初に確認されるのは6世紀第Ⅱ四半期、高知平野北東部においてである。⁽¹⁰⁾その後、前期古墳の不振とは対照的に6世紀後半からの古墳確認数は急増し、6世紀末～7世紀初頭にはそのピークを迎える。さて、先に述べたように、後期の住居の検出例は高知平野東部に集中しており、古墳の分布状況ともほぼ一致している。これらの遺跡では住居址が唯1棟しか検出されていない2遺跡を除いて、全て6世紀後半頃に住居址が出現し、続く6世紀末～7世紀初頭の時期に住居址数が増加する。そしてそれに先行する時期については遺構はおろか、遺物も検出し得ないのが特徴である。この事実から、これらの遺跡が6世紀後半に成立し、6世紀末～7世紀初頭に発展的展開をしたものであることは自明である。以上を換言すると、当地域では横穴式石室の初現に続く6世紀後半、新規に集落の編成が行われたが、その動きは以前と比較して爆発的とも言える古墳の急増をみるような、社会現象の変化に照応するものであった。

次にそれらの住居が備えていたカマドから見て、課題となる点を記しておきたい。本県⁽¹¹⁾の古墳に関する現在の資料からは、水系などによる明らかな系統を看取し得る段階ではないが、上で行ったカマドの比較においても同水系または比較的それに近い下ノ坪・深淵・ひびのきサウジ遺跡、土佐国衙跡・小籠遺跡の各組み合わせではそれぞれ明らかな類似性は見られず、むしろ水系の異なる土佐国衙跡と下ノ坪遺跡の類似が目立つのみであった。ところで、表Dのように現在最も多くの住居址が検出されている土佐国衙跡は高知平野北東部の国分川右岸に位置する。この一帯は県下最多の古墳を数える舟岩古墳群や県下最大規模の円墳である小蓮古墳、さらに県下で唯一確認されている古墳時代の窯跡である笠の川窯跡を擁する地域である⁽¹²⁾。本稿で主題としている古墳時代のカマドについては、その起源を朝鮮半島からの文化招来の文脈の中で考えなければならないことは、近年の共通認識であろう。カマドと須恵器は同時に地方へ招来されたという見方もある⁽¹³⁾。カマドについてその設置場所や規模・形態がカマドの概念を、石材の使用法等が構築方法を、甗や長甕が関連する用具をそれぞれ象徴するものと考えれば、土佐国衙跡においては集落の成立当初より、カマドについてはその概念・構築法・関連用具が全て揃った生活様式を獲得していた可能性が高いのであり、その近隣ではまさに6世紀後半、須恵器の生産が確認されるのである。笠の川窯や県下最大規模の古墳群を土佐国衙跡の集落が営んだとは短絡しないが、本県における古墳文化の本格的な展開期において、興味深い一面と言うことはできるであろう。

(4) 他地域との比較より見た高知平野のカマドを持つ堅穴住居

高知平野の堅穴住居のカマドについてまとめたが、その特徴を把握するには他地域との比較が必要である。ここで膨大な資料を分析・検討することはできないが、若干の比較を行いたい。対象は四国地方の他県を中心に、西日本の例を一部参考とした。

松山平野のカマドは5世紀中葉～後半の松山大学構内遺跡 SB-1⁽¹⁴⁾を初現とし、7世紀初頭頃まで継続して検出例がある。初現期に続く5世紀末には検出例も増加し、主として北壁中央で燃焼部や煙道部が大きく突出しない例が多い。構築土が残存する例も多く、なかには何らかの石が伴う例もあるが^(15,16,17)、カマドの構築材として石を用いた例は確認できない。カマドから高杯が出土することは珍しくないが、支脚とする報告例は少数と言える。当地域は北久米浄蓮寺遺跡などで見られる初期の様相とその後の連続的且つ広範な普及を見れば、カマドを持つ生活様式を早い段階より摂取し、且つそれが連続的に展開していった地域と言える。そして規模や袖の遣り方を見れば、時期的な変化も看取できる。なお、カマドを持つ住居の検出例は近年さらに増加している模様である^(18,19,20)。

香川県下のカマドは中期の稲木遺跡 SH-05⁽²¹⁾が初現とも言われるが後続せず、高松平野では5世紀後半～末の住居址の中央部に炉跡と見られる遺構が検出される例があり、同期の火処の様相は明確でない⁽²²⁾。カマドの検出例は6世紀後半以降に急増して殆どの住居址にカマドが造り付けられ、位置については例外はあるものの、北壁中央が主流である。カマド本体の残りは極めて悪い例が多いが、これには遺跡ごとの差異が看取される。形態的には長い煙道が検出されるものが目立ち、構築材として石を使用したものは確認できない。支脚については報告例が少なく、不明確である。しかし、丸亀平野では石や高杯を用いた支脚の報告例が蓄積されてきている⁽²³⁾。

徳島県で参照できた資料は少ないが、吉野川流域で検出例が見られる。カマドは5世紀末より7

世紀前半まで検出例があり、やはり北壁中央に造り付けるものが多い。6世紀後半以降のカマドの形態には煙道部が突出したものがある。⁽²⁴⁾近年後期の住居址が多数検出された大柿遺跡では、カマド部分の掘方は床より30cmほど深く掘り下げている。また例外的ではあるが長さ約1mを測る煙道を持つものもある。支脚は土師器甕を逆さにしたものと石を使用したものがあるとされ、高杯転用は確認できない。遺物の出土量は住居によって差があり、また、故意に打ち欠くなどして廃棄された土器がある。⁽²⁵⁾

以上の四国の他県との比較をした場合、まず高知平野では他地域でカマドが出現する時期の住居址の検出例がなく、初現期の比較等については今後の資料の蓄積を待つべきであろう。カマドの位置や形態について6世紀中葉以降の例で比較した場合、北壁中央が主流で甕1つ掛けであるという大枠についてはほぼ共通しており、四国における大勢として捉えておくことができる。カマドの構築法については、高知で下ノ坪・国衙型としたような石を構築材としたものは他県では見うけられなかった。そして、香川県や吉野川流域の検出例のうち煙道部が突出する形態は高知平野との相違が大きく、松山平野の支脚の様相も高知平野と同様ではない。大略、高知平野のカマドは香川県や吉野川流域とは異なる様相が多く、中でも下ノ坪・国衙型としたものは四国内で特異なものと言うことができよう。

それでは高知の下ノ坪・国衙型について、西日本でさらに比較対象を広げればどうであろうか。石材の使用という点に絞って見てみると、岡山から近畿地方の大部分では類似例が僅少である。そのような構築例が纏まって確認できるのは北九州から中国地方東部にかけてであり、琵琶湖周辺にも一部の遺跡で検出例がある。その内で詳細について検討することのできた例は限られるが、福岡県塚堂遺跡の5世紀前半代の住居址や、滋賀県柿田遺跡の7世紀後半代の住居址には、石材の位置関係、延いてはカマドの平面規模に至るまで本県の下ノ坪・国衙型と一致したカマドを持つ住居址が存在する。⁽²⁶⁾広島県や島根県の6世紀後半から7世紀にかけての時期にも、カマド設置位置や細部の寸法が異なる場合があるものの、石材の使用法が下ノ坪・国衙型と類似した例がある。現在、他の考古学的諸要素を併せてそれらとの直接的な関係を論ずることはできないが、現段階で高知平野のカマドに近隣地域に類例を求めることのできないものがあることは事実である。しかし、上記のように大きな時期差が存在する問題も含めて、かかる事象が示す内容については今後の課題である。

(5) 住居址出土の遺物について

表C、Dで取上げた住居址では遺物の出土状況に幾つかの特徴が見られた。先ずカマド出土の遺物では使用状態での遺棄や転用支脚等で説明できないものも多くあり、カマド祭祀を想定せざるを得ない。器種にはバリエーションがあって一貫した規制は看取できないが、そのなかでカマドに甕が伏せられていた例が確実に4例存在し、一定の傾向と言えるかもしれない。カマドに土器を伏せる例としては松山市で土師器壺や高杯を、善通寺市で甕を伏せた報告例があり、⁽²⁷⁾いずれも時期は後期後半である。次に住居内での遺物を見ると、カマド付近を中心に煮炊具が多く出土する中にあって、住居南部壁際付近等より須恵器蓋杯や甕が単独で出土した4例が注意される。松山市ではこれに類似した2例があり、「同一の理念もしくは祭儀が存在した」と考えられているが、ともに5世紀代に廃絶する住居址である。⁽²⁸⁾なお、下ノ坪遺跡ST 2南壁際出土の蓋杯には、朱の付着が認めら

れた。また、住居址内に同一個体の破片が広く散らばっていたり、床面と埋土出土のものが接合関係にあるような場合がある。これに対しては、住居廃絶時の祭祀的行為を想定しておかなければならない。さらに、住居址によって出土遺物の量にも大きな差が見られる。これについてはカマド廃棄行為のバリエーションと併せて、単なる個性というより集落全体としての祭祀意識⁽²⁹⁾の反映、或いは住居廃絶理由の違い⁽³⁰⁾といった2つの側面からの検証が今後必要である。ところで報告で見る限り、四国全体では下ノ坪遺跡 ST 1 や土佐国衙跡 ST 10、深淵遺跡 ST 5 の出土遺物の量や器種、出土状況はやや例外的であり、特に香川県とは相違が大きいように見える。香川県の後期の住居址では、出土遺物の多くを杯類が占めるからである。先に見たように高知平野の住居址では甗も多く出土するが、諸状況から見て、甗とそれに組み合う甕による煮炊形態の普及において、高知平野が他を凌駕していたとは考え難い。この点に関して香川県では、カマドが確認できない前期～中期の住居址から甗が出土する例があり、「火の使用状況を検討すること」が課題とされている⁽³¹⁾。先述の後期の矛盾に関しては、例えば香川県で集落内の土坑や溝から甗・甕が出土している例などが手掛かりになるかもしれないが、現状では資料が揃っていない⁽³²⁾。何れにしても四国内で多様な様相を示しており、課題は多い。

(6) おわりに

本県における今後の課題としては、下ノ坪・国衙型としたカマドの普遍性及び他の類型の検討や、住居址での遺物の出土状態による意味付け等がある。いずれも今後の資料の蓄積を待つものである。また本県の特殊性から6世紀前半以前に遡る様相が不明であった。しかし、僅かながら古墳は存在し、最近ではこれまで高知平野において殆ど検出例のなかった5世紀代の遺物も蓄積されてきているので、将来その時期の様相も明らかにされよう。また、他地域との比較については十分な検討ができたとは言えず、更に詳細な計測値の比較も必要である。また愛媛・香川・徳島の各県では殊に近年、当該期の集落の調査が進行している。

以上長々と述べてきたが、様々な問題を残しつつも以上で考察を閉じたい。最後になったが愛媛県埋蔵文化財調査センターの中野良一氏、香川県埋蔵文化財センターの片桐孝浩氏、徳島市教育委員会の勝浦康守氏、徳島県埋蔵文化財センターの栗林誠治・久保脇美朗の両氏には各県の様相について貴重な教示を頂いた。また、高知県埋蔵文化財センターの廣田佳久氏、出原恵三氏には考察を書くにあたり助言を得た。記して謝意を表する。

(註)

1) 下ノ坪遺跡より約5.5km北西に所在する。

『土佐国衙跡発掘調査報告書 第2集』高知県教育委員会 1981年

『土佐国衙跡発掘調査報告書 第3集』高知県教育委員会 1982年

『土佐国衙跡発掘調査報告書 第5集』高知県教育委員会 1984年

廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書 第9集』高知県教育委員会 1989年

2) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年

3) 下ノ坪遺跡より約6km東の香宗川流域に所在する。

出原恵三『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会 1993年

- 4) 下ノ坪遺跡より約6 km北西に所在する。

『小籠遺跡Ⅱーあけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年

- 5) 下ノ坪遺跡より約5 km北に所在する。

高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡』高知県土佐山田町教育委員会 1990年

- 6) 「Loc. 10 B」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第6分冊 高知県教育委員会 1986年

- 7) 『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会 1992年

- 8) 杉井建「竈の地域性とその背景」『考古学研究157号』1993年

- 9) 外山政子「群馬県地域の土師器甑について」『研究紀要6』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989年

- 10) 廣田佳久『長畠古墳群ー高知自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年

- 11) 廣田佳久「高知の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第9回大会資料 1995年

- 12) 廣田佳久「南四国の須恵器ー周辺地域における須恵器の変遷ー」『王朝の考古学』雄山閣 1995年

- 13) 岩松保「カマドのある住居と無い住居ー京都府南部の場合ー」『京都府埋蔵文化財論集第1集』京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年

- 14) 『松山大学構内遺跡ー第2次調査ー』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991年

- 15) 中野良一「古墳時代」『持田町三丁目遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995年

- 16) 「樽味高木遺跡」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994年

- 17) 相原浩二『辻町遺跡ー2次調査地ー』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1995年

- 18) 橋本雄一『北久米浄蓮寺遺跡ー3次調査地ー』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994年

- 19) 「北井門遺跡」『まいぶんえひめNo.24』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1996年

- 20) 『文京遺跡第14次調査現場説明会資料』愛媛大学埋蔵文化財調査室 1997年

- 21) 笹川龍一『稲木遺跡』稲木遺跡発掘調査団 1989年

- 22) 片桐孝浩氏よりご教示戴いた。

『空港跡地遺跡発掘調査概報』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター 1994年

北山健一郎・森下友子『太田下・須川遺跡 高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1995年

- 23) 「仲村廃寺」註7、「吉野下秀石遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1994年

24) 註7

25) 『四国縦貫自動車道建設に伴う大柿遺跡発掘調査現地説明会資料』日本道路公団四国支社・徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター 1996年

26) 馬田弘稔・福島邦弘・小池史哲『塚堂遺跡Ⅱ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集』福岡県教育委員会 1984年、馬田弘稔『塚堂遺跡Ⅳ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集』福岡県教育委員会 1985年

仲川靖『柿田遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1989年

27) 註15、21

28) 註17、18

29) 寺沢知子「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学第16号・古墳時代の社会と変革』雄山閣 1986年

30) 中野良一氏より御教示戴いた。

31) 北山健一郎・森下友子『太田下・須川遺跡 高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1995年

32) 野中寛文「大門遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊』香川県教育委員会・日本道路公団 1987年

片桐孝浩「柞田八丁遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五冊』香川県教育委員会・日本道路公団 1988年